

食卓

いちのみや(劇団かたかご)

登場人物

夫 妻 男

舞台中央にちやぶ台。そこに∞人分の食事が用意されている。白米、焼き魚、味噌汁、サラダ。  
男が一人、食事を食べている。  
男の前方から夫が入ってくる。

夫

(立ち止まって) だれだい、あんた？

男

おかえりなさい。

夫

あんた、俺の知り合いかい？

男

いいえ

夫

でもさつき、おかえりなさいって

男

ええ、待ってましたから。

妻、奥からでてくる

妻

あら、あんたお帰りなさい。ちょうどよかった。食事の用意、できてますよ。

夫

あんた、この人の知り合いかい？

妻

いえ、ぜんぜん

夫

なんで家にあげたんかい？知らない奴を

妻

そんな、わたしの用心が足りないっていうんですか？

夫

まあ、そういうことだよ

妻

なにを言うんですか、私は知らない人を家にあ

夫 げたりなんかしませんよ。私が帰って来た時から、あの人はそこにいたんですから。家に来る人は、誰かわかりませんが、家にいる人はみんなお客さんなんですから。

妻 だから、なんなんだい、あの人はお客さんですよ、あなたを待っていたようで。

夫 だから、なんで  
男 どうしたんですか？冷めちやいますよ

夫、妻、座り、ごはんを食べ始める。

夫、お腹が空いていたのか勢いがよい。

夫 誰かと間違っているんじゃないかい？

男 いえ、合ってますよ。だって、ほら、ここにロープがあるんですから

夫 え？

男 ロープのある家を探しに来たんです。

妻 あら、なんでこんな安物のロープを（と、味噌汁をすする。）

夫 安物って言ったってこれは畑で使うロープなんだよ。なんに使うって言うんだい。（と、焼き魚を食べる。）

男 首を吊るんです。（ドレッシングをかける）

妻 あらやだ。首を吊るんですって。でも、それにしてもは長すぎるんじゃないですか（と、白米を一口。）  
夫 おいおい、よしてくれよ、これは一応仕事道具なんだから、切れたりしちゃ使えなくなる。ドレッシングを取ってくれ。

男 はい。（ドレッシングを置く。）いいんですよ、これで。自殺するには、首吊りが一番だって聞いた

んです。すぐに死ぬのでロープが切れる心配もありませんよ。

夫　なんだ、それなら安心だ。(と、ドレッシングをサラダにかける。)

男　それでは食べ終わったらお借りしますね。(と、焼き魚の骨を几帳面にとる。)

妻　だめですよ、そんな安いロープじゃなくて、もっと豪華なものしなくちゃ。お客さんに失礼ですよ。

男　いや、そんなお構いなく。(魚の骨を取っている。)

夫　そうだよ、このロープだって、それなりの値がするんだから。

妻　でも、泥とかついてますから。ねえ、ほら、一生に一度なんですから。(お茶を一口。)

男　いえいえ、だってほら。代わりもありませんから。(まだ、魚の骨を取る。)

妻　そうだ、毛皮のマフラーとかどうですか。しっかりとりますから。

男　だめですよ、そんな。マフラーじゃ、幅が広すぎて、死にきれない。(ようやく魚を食べ始める。)

夫　そうだ、それはそうとこのロープすぐに使うから、ちゃんと返してくれよ。(白米を口にかきいれる)ええ、もちろん使い終わったらすぐに返しますから。(まだまだ食べ終わらない。)

夫　ああ、すぐにだよ、あんたが死んだらすぐに畑に出るからね。(もうすぐ完食)

男　あ、ちよっと待ってください。首をつつてからしばらくしてなきや、息を吹き返すかもしれませんとはいってもねえ。

夫　お願いします。五分でいいから、そのままにしておいてくれませんか。(熱いお茶を冷ましている。)

夫 だめだよ、野菜の質は時間に敏感なんだ。(完食)  
妻 いいじゃないですか、お客さんが言うんですから、  
5分間くらい。野菜は5分間ほったらかしにして  
も枯れないんですから。(サラダを食べきった。)  
夫 うーん  
男 きまりですね、この米と魚と野菜を食べて、味噌  
汁を飲み干したら、ロープを貸してくださいね。  
妻 あ、食事に栗羊羹を用意してますよ。

男、箸が止まる。

男 栗羊羹を食べ終わってからにしますね。

溶暗

おわり